

たつ え おお だいら
龍 江 大 平 遺 跡

主要地方道飯田・富山・佐久間線道路整備事業に先立つ
埋蔵文化財包蔵地龍江大平遺跡発掘調査報告書

1995年3月

長野県飯田市教育委員会

序

飯田市は、自然的条件に恵まれ、また、古来交通の要衝に位置しており、埋蔵文化財をはじめ多くの文化財を遺しています。市南部の龍江地区の場合も、縄文時代以来各所に先人達の足跡が刻まれており、古墳・墓址・城跡も多く残っています。また、近世以降にあっては、地区内今田の大宮八幡神社に人形淨瑠璃が奉納されており、平成5年度竣工した『今田人形の館』を中心には今田人形芝居が保存・伝承され、地域の活性化が図られているところです。これらの文化財は、私たちの地域社会や文化を形作ってきたさまざまな証しであり、できるかぎり現状の姿のままで後世に残し伝えることが私たちの責務であります。けれども、同時に、私たちはより良い社会や生活を求めていく権利を持っています。ですから、日常生活のさまざまな場面で、文化財の保護と開発という相容れぬ事態に直面することが多くなっています。こうした場合、発掘調査をして記録としてとどめることも止むを得ないものといえましょう。

龍江地区は、飯田市近郊の農村地帯として、リンゴなど果樹栽培を主体とし、名勝天龍峠を控え観光農園が多く営まれる地区です。しかし、竜西に比較して道路整備が十分でなく、観光資源の活用や過疎化対策のためにも、幹線道路の整備が求められています。殊に、主要地方道飯田・富山・佐久間線の拡幅改良工事は、地区内の主要幹線として懸案の事項がありました。そうした高い公共性を有する点で、今回の開発はやむを得ないものと考えられます。けれども、事業予定地は埋蔵文化財包蔵地龍江大平遺跡として周知されており、道路建設により一部が壊されてしまうことになりました。そこで、次善の策ではありますが、事業実施に先立って緊急発掘調査を実施して、記録保存を図ることとなりました。

調査結果は本書のとおり、道路建設部分に限定されて十分に集落の実態を把握することができなかったわけですが、縄文時代前期および古墳時代の集落の一画が調査されました。当地区はこれまで本格的な発掘調査が行われなかった地域だけに、地域の歴史解明の大きな手掛かりが得られたものと確信いたします。

最後になりましたが、文化財保護の本旨に厚いご理解を賜った地元の皆様、現地作業・整理作業に従事された作業員の方々に深甚なる謝意を申し述べる次第であります。

平成7年3月

飯田市教育委員会

教育長 小林 恭之助

例　　言

- 1 本書は、主要地方道飯田・高山・佐久間線道路整備事業に先立つ『龍江大平遺跡』発掘調査報告書である。
- 2 本発掘調査は、飯田建設事務所の委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
- 3 本調査は、平成5年11月に試掘調査を、平成5年12月に本発掘調査を実施し、本報告書刊行のための諸整理作業は、平成6年度に実施した。
- 4 本遺跡の発掘調査に当たり、「T.O.O」の略号を用い、整理図面類および遺物等すべてに使用した。
- 5 本書は調査員全体で検討の上、III-1・2・6-(2)については下平博行が、III-3・4・5・6-(2)については馬場保之が作表し、その他については、吉川 豊・馬場・下平が分担執筆し、それぞれの分担は文末に記した。
- 6 本書の編集は、調査員全体で協議の上、下平が行い、小林正春が総括した。
- 7 本書に掲載した図面類の整理・遺物実測は、馬場・下平が行った。なお整理作業実施にあたり、調査員および整理作業員が補佐した。
- 8 本書に掲載した造構図中、穴の中に記した数字は、それぞれの深さ（周囲の面からの）を単位cmで表し、エレベーションの水平線に記入した数字は、標高を単位mで表している。
- 9 本書に掲載した写真は、造構については馬場・下平が、遺物については福沢好晃・下平が行った。
- 10 本書に関連する出土品および諸記録は、飯田市教育委員会が管理し、飯田市上川路「飯田市考古資料館」に保管している。

本文目次

序		
例	言	
目	次	
I	発掘調査の概要	1
	(1) 調査に至るまでの経過	1
	(2) 調査位置・調査区の設定	1
	(3) 発掘調査の経過	1
	(4) 調査組織	2
II	遺跡の環境	5
	(1) 自然環境	5
	(2) 歴史環境	5
	(3) 層序	9
III	調査結果	11
1.	縄文時代の竪穴住居址	11
	(1) 1号住居址	11
	(2) 2号住居址	11
	(3) 5号住居址	15
2.	縄文時代の土坑	15
3.	古墳時代の竪穴住居址	17
	(1) 3号住居址	17
	(2) 4号住居址	19
4.	古墳時代の掘立柱建物址	19
5.	中世の集石墓	22
6.	時期不明の遺構	22
	(1) 溝址	22
	(2) ピット	22
IV	総括	30
	引用参考文献	33

I 発掘調査の概要

(1) 調査に至るまでの経過

平成4年度において、飯田建設事務所長 宮島直人より飯田市龍江大平地籍における主要地方道飯田・富山・佐久間線道路整備事業（県単道路改良〔特定道路〕工事）の計画が提示され、平成4年9月4日、事業にかかる埋蔵文化財包蔵地について、事業主体者である飯田建設事務所と長野県教育委員会・飯田市教育委員会の三者が現地で保護協議を実施した。その結果、事業予定地の龍江大平遺跡にかかる部分について、飯田市教育委員会が試掘調査を実施し、遺構・遺物が確認された場合改めて協議を行なうこととなった。

平成5年11月に試掘調査に着手した。重機に試掘レンチを掘削し、引き続き作業員を入れて遺構・遺物の確認調査を行なった。その結果、縄文時代・古墳時代の竪穴住居址等が確認されたため、再度保護協議を実施し、発掘調査をして記録保存を図ることとし、調査は飯田市教育委員会が実施することとなった。そして、平成5年11月17日、遺跡発掘調査の委・受託契約を飯田建設事務所長と飯田市長との間で締結した。

(2) 調査位置・調査区の設定

調査区の設定は、飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づいて、株式会社ジャステックに委託実施した（基準メッシュ図の区画方法については、飯田市教育委員会 1994 「中村中平遺跡」参照）。

調査地点は、MC-04 19-44内に位置する（神図1）。

(3) 発掘調査の経過

諸協議に基づいて、平成5年12月16日、本発掘調査に着手した。12月16日から18日にかけて重機を入れて表土剥ぎを行ない、19日、主要地方道に面する東側から作業員を入れて作業を開始した。重機の荒れ土を除去し、竪穴住居址・土坑・小柱穴その他の遺構を検出し、順次掘り下げて精査した。その後、排土置き場下の未調査部分について、重機を再度入れて表土剥ぎを行ない、遺構検出・掘り下げを行なった。そして、遺構・出土遺物についての全体および個別の写真撮影等を行ない、航空写真撮影・航空測量調査を㈱ジャステックに委託実施し、カマド・炉址等の断

ち割り調査や補充の測量調査をして、6年2月8日、現地での作業を終了した。

引き続き、平成6年度にかけて、飯田市考古資料館において現地で記録された図面・写真類の整理作業、出土遺物の水洗・注記・接合・復元・実測・トレース・写真撮影等整理作業および報告書作成を行なった。

(4) 調査組織

1) 調査団

調査担当者 小林正春・馬場保之

調査員 佐々木嘉和・佐合英治・吉川 豊・山下誠一・吉川金利・滝谷恵美子
福沢好晃・伊藤尚志・下平博行

現場作業員 市瀬長年・井上恵資・今村春一・小沢信治・北川 彰・木下喜代恵
木下 傳・木下良子・熊谷義章・櫛原政夫・佐々木文茂・塙沢澄子
海上正一・塙原次郎・仲田昭平・原田四郎八・広井 保・福沢トシ子
福本静雄・福本まさ志・細井光代・牧内 修・正木実重子・松井明治
松下直市・松下真幸・松下光利・溝上清見・森 章・柳沢謙二・山田康夫
吉川和夫・吉川政実・吉沢二郎・依田時子

整理作業員 新井ゆり子・池田幸子・金井照子・金子裕子・唐沢古千代・木下早苗
木下玲子・櫛原勝子・小池千津子・小平不二子・小林千枝・斎藤徳子
佐々木真奈美・佐々木美千枝・佐藤知代子・関島真由美・田中恵子
中島真弓・丹羽由美・荻原弘枝・櫛本宣子・平栗陽子・福沢育子・福沢幸子
古根素子・牧内喜久子・牧内とし子・牧内八代・松島直美・松本恭子
三浦厚子・南井規子・宮内真理子・森藤美知子・吉川悦子・吉川紀美子

2) 事務局

飯田市教育委員会社会教育課

安野 節 (社会教育課長、平成5年度)

横田 穆 (" " 、平成6年度)

原田吉樹 (" " 文化係長、平成5年度)

小林正春 (" " 文化係長、平成6年度)

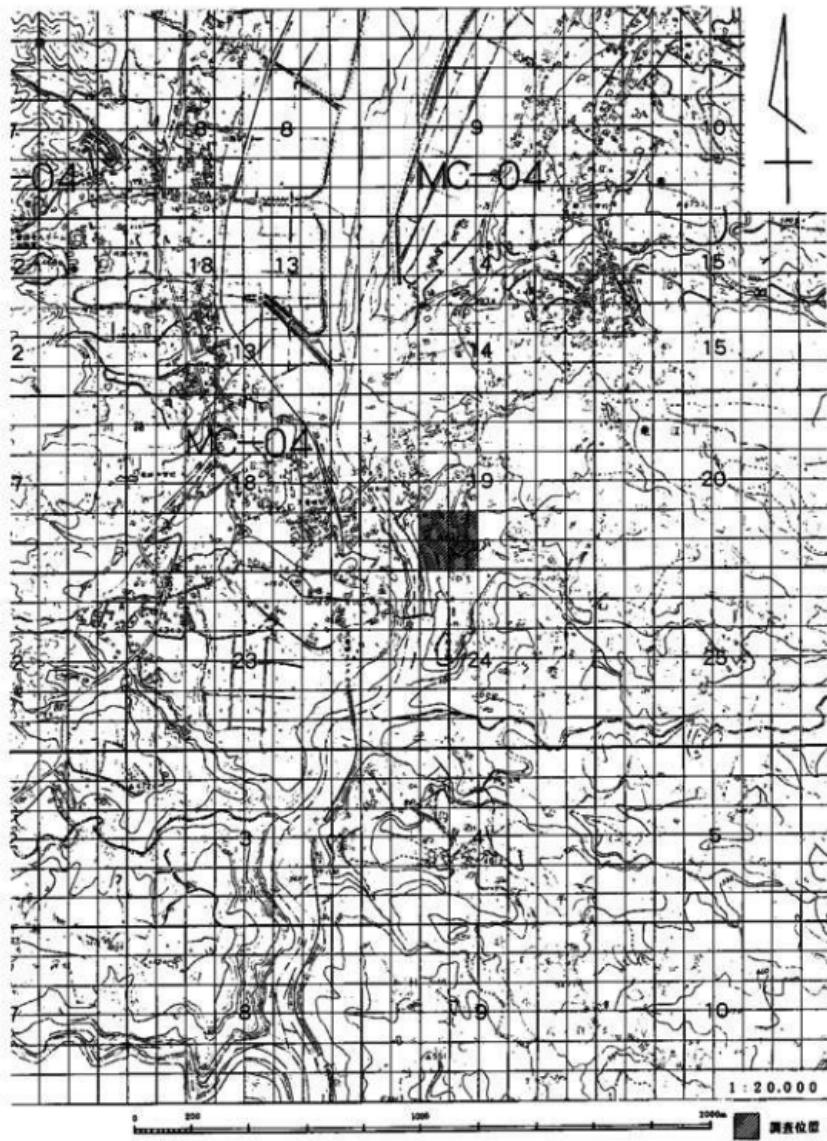
" (" 文化係、平成5年度)

吉川 豊 (" ")

山下誠一 (" " " 、平成6年度)

馬場保之（　〃　〃　）
吉川金利（　〃　〃　）
滝谷恵美子（　〃　〃　、平成5年度）
福澤好晃（　〃　〃　）
伊藤尚志（　〃　〃　、平成6年度）
下平博行（　〃　〃　）
岡田茂子（　〃　社会教育係）

（馬場保之）



挿図1 基準メッシュ図区画調査位置

II 遺跡の環境

(1) 自然環境

飯田市龍江地区は、飯田市街地から南東へ約4kmに位置し、天竜川の東側に広がる地区である。北は駒ヶ沢川で下久堅地区と、南は紅葉川で千代地区と境界を接している。東は伊那山地の海拔700m程度の頂でやはり上久堅・千代地区と境を接している。

伊那谷の基本的な地形は、断層運動により形成された構造段丘と、天竜川の侵食により形成された河岸段丘が組み合わされた、天竜川の流れに沿ったほぼ南北方向の段丘地形を特徴としている。これらの段丘を切る方向に小河川が流れ、それらにより形成される扇状地があちらこちらにみられ、かなり複雑な様相を呈している。竜東地区は山地がせまり小河川の落差が大きく、平坦部分は少ない。

龍江地区の最下段は天竜川の氾濫原であり、現在治水対策事業が実施されている。昭和36年の灾害で土砂の堆積・流失があったため、前地形がわからないが、主要地方道飯田・富山・佐久間線が通る段丘面との差はかなりあったと考えられる。この主要地方道飯田・富山・佐久間線が乗る段丘面は天竜橋から姑射橋まで細長く伸びている。

その上段部にも天竜川に平行方向（ほぼ南北方向）に天竜川に向かって緩やかに傾斜した段丘面をみるとことができる。これらは、小河川（北から塩田沢川・城沢川・蟹沢川・御庵沢川・樋沢川・清水川・大平沢川）により、いくつかに寸断されており、それほど広さはない。その東側は、伊那山地の前山である高森山・雲母丘陵から伸びる尾根上に平坦地がいくつかある。

気候面でみれば、伊那谷は比較的温かく、龍江地区は飯田市の中でも温暖な地域のひとつである。平均気温は、13℃に近く、降水量も年間1,600mm程度である。

龍江大平遺跡は中位の段丘（主要地方道飯田・富山・佐久間線が通る段丘面の上段）に位置しており、東側の上位段丘崖下付近に湿地が広がり、段丘縁辺部は比較的乾燥している。

(2) 歴史環境

龍江地区での発掘調査はこれまでほとんど実施されていないため、古代・中世は不明な点が多い。縄文時代前期としては、中段に位置する本遺跡で中葉の黒浜式併行期の堅穴住居址が3軒調査された。さらに、下段の龍江阿高遺跡では前期の集石炉や遺物包含層が確認されており、付近に集落が存在する可能性がある。中期以降の発掘調査例はほとんどなく、下段の氾濫原に面した龍江細新遺跡では、住居址と遺物包含層が確認されている。



挿図2 調査遺跡位置図

弥生時代・古墳時代の集落は、天竜川沿いの下段を中心に広く分布しているものと考えられる。現在発掘調査を継続している治水対策事業では、龍江阿高遺跡で集落や方形周溝墓群が、また、龍江細新遺跡で弥生時代から古墳時代後期にかけての大規模な集落が調査されている。中段の本遺跡では、古墳時代前期から後期の過渡期の集落を部分的に調査したのみであるが、散在的な住居の分布が考えられる。また、古墳は、多くは中段の段丘崖縁部に築造されており、10基の存在が知られているが、現存するものはハンバ古墳・石原古墳・羽入田原遺跡の3基にすぎない。記録に拠ると、後期に属する小規模の円墳が多い。

龍江地区東寄りの高森山の尾根と尾根の間の洞には、須恵器の窯跡の存在が知られており、御殿田窯跡・上の城窯跡はすでに調査されているが、この他にもう数カ所窯跡があり、この山地一帯は古窯跡群を形成していたものとみられる。これらの窯跡で生産された須恵器の消費地は天竜川沿いに展開する集落と考えられる。

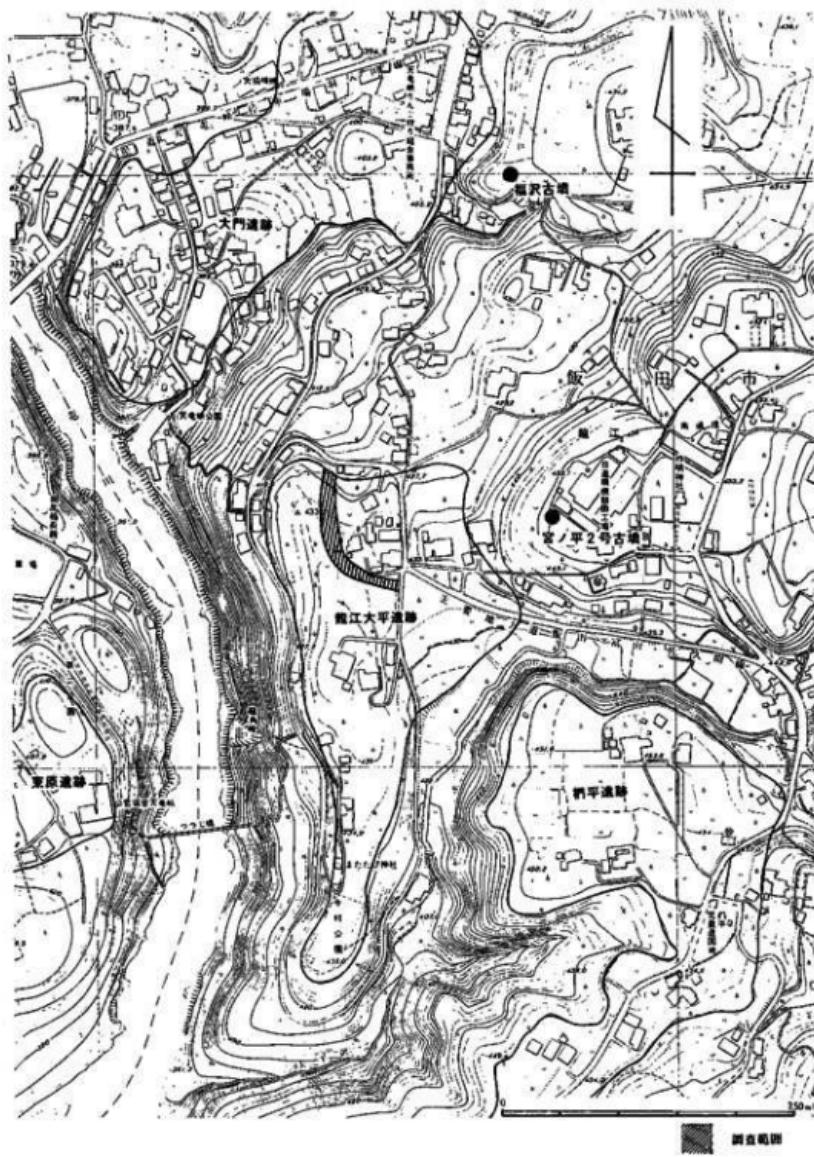
中世は知久氏の支配に入っていたとみられる。現在一般廃棄物最終処分場がある上城には、兎城と呼ばれている城跡があり、堀・土塁・曲輪が残っている。この城は「今田原城」とも呼ばれたり、地区内新地地籍にある春日神社は、南北朝期にここ城主である桃井掃部守定繼が建てたと伝えられる。上城付近には「百目」「二百目」等の地名が残っている。また、高森山から延びた尾根の、神之峰を見通せる地籍は「池の平」と呼ばれ、その突端部は「城山」と呼ばれて堀・曲輪が残っている。周辺には「窯場」「御殿田」等の地名がある。この城を「上の城」、兎城を「原城」と呼ぶ人もいる。

近世には、地区内尾林に「尾林古窯」と呼ばれる登り窯が操業しており、摺鉢等の日常飯器が焼かれていた。尾林西側斜面にある八幡神社には、かつて『慶安治四（1607）年六月日九右衛門』の銘をもつ狛犬が奉納されており、飯田市有形文化財に指定されている。県内最古の焼物の狛犬で、三体とも「阿形」を表す。現在、「尾林焼」と呼ばれる焼き物は「尾林古窯」とはつながりがない。伝承によれば、明治から大正時代にかけて日用品を焼いた窯が八幡神社西側の尾根にあった。それを引き継いだものが現在の「尾林焼」とされる。他に、近代の焼き物として「東焼」がある。窯元であった田中地籍の松島氏の屋号「東」に因み、御庵沢川南側の高森山支陵の「金治ヶ原」に一部残存する。火鉢・壺等の日用雑器を焼いたとの記録があり、龍江地区を中心に流通していたとされる。

近世以降、庶民の娛樂としての地芝居・人形淨瑠璃が盛んに行なわれており、神明社や尾科靈訪神社等各所に芝居に関する施設や記録が残っている。殊に、地区内今田地籍には伊那谷四座のひとつ、今田人形芝居が伝承されており、大宮八幡神社に奉納されている。

龍江地区は、文化・文化財が比較的よく伝承された地域のひとつといえよう。

（吉川 豊・馬場保之）



插図3 調査遺跡および周辺遺跡地図

(3) 層序

龍江大平遺跡の層序については、挿図4に記した。層序調査地点は、調査区北西、AV-49グリットである。以下基本層序を説明する。

- I層 耕作土層。層厚40cm前後。
- II層 ローム層
にぶい黄橙色。黄橙色スコリアを少量含み、粘性あり。層厚20cm～30cm前後。
- III層 軽石層
黄橙色を呈する。径5mm～2cmの軽石が密集する層。層厚40～50cm。
- IV層 ローム層
褐色を呈する。総全体に径1mm程度のマンガン粒子を少量含む。粘性あり。層厚約4cm。

V層 褐灰色土層

III層・IV層の入り交じった層。
径1cm大の軽石・粘土ブロック
などを含む。層厚約20cm。

VI層 ローム層

褐灰色を呈する。白色スコリア
をわずかに含む。粘性あり。層
厚20cm前後。

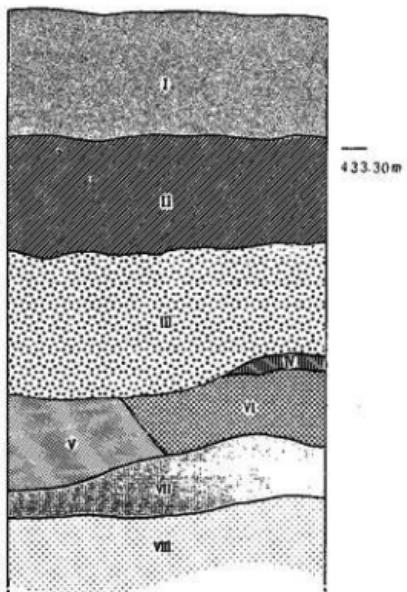
VII層 砂層

褐灰色を呈する。細かい砂にVI
層ブロックが少量含まれる。層
厚20cm前後。

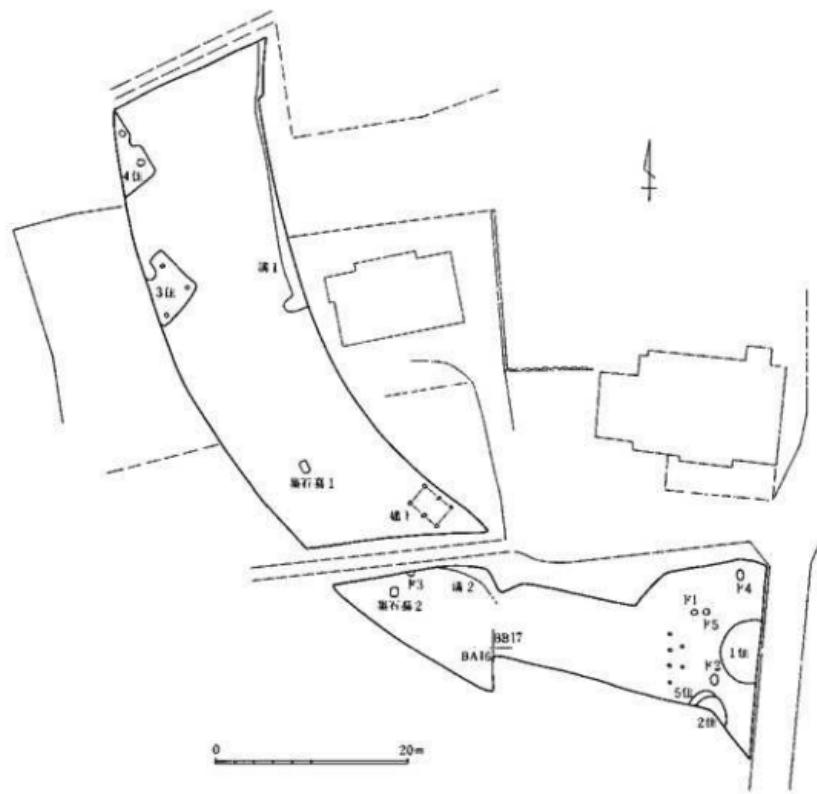
VIII層 砂層

白色を呈する。VII層に比し、砂
の粒径が細かくなる。やや粘性
あり。層厚20cm前後。

(下平博行)



挿図4 基本層序



插図5 調査造構全体図

III 調査結果

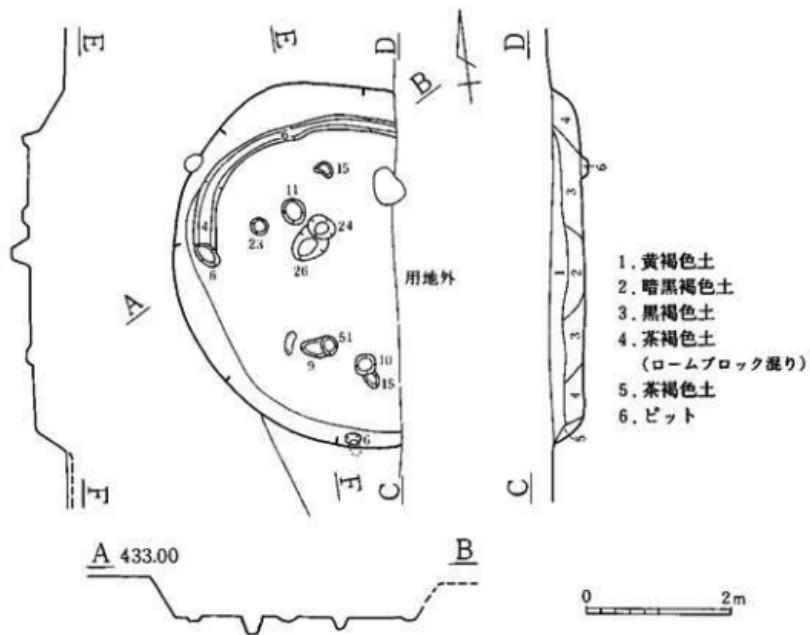
1. 縄文時代の堅穴住居址

(1) 1号住居址（挿図6、8、9）

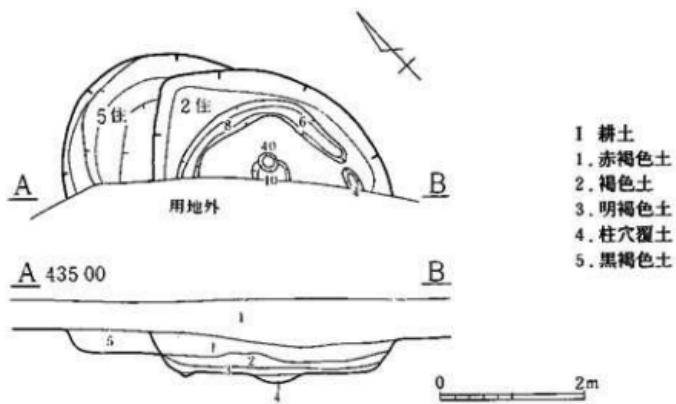
遺構番号	1号住居址	時期	縄文前期中葉	検出位置	A Y - 30	検出面	II層上面
平面検出	結果 明確	根 拠	土の差及び遺物分布				
新旧関係	なし			根拠			
埋 土	分層 5層	埋没過程	自然埋没	包含物	焼土・炭化物		
平面プラン	円形	規模	4.8×(3.5)m	主軸			
床	検出 明確	状態 堅固	掘方 なし	貼床 なし	貼替え		
床面焼土等	有無 なし	状況					
壁	検出	II層を掘り込み明確		状態	やや緩やか		
柱 穴	有無 あり	内容 主柱穴3本補助5本	遺物 なし	柱痕 なし			
周 溝	状態 北側半分		遺物 なし				
炉	不明						
備 考	住居内施設	なし					
	埋土中遺物	縄文前期中葉深鉢2個体（2層中）（挿図8） 同時期土器片少量 （挿図9） 石匙・石鎌・錐・黒曜石剥片（挿図8）					
	床面遺物	縄文前期中葉土器片少量・黒曜石剥片					

(2) 2号住居址（挿図7）

遺構番号	2号住居址	時期	縄文前期中葉	検出位置	A W - 28	検出面	II層上面
平面検出	結果 不明瞭	根拠	土の差				
新旧関係	5号住居を切る			根拠	セクションから		
埋 土	分層 4層	埋没過程	自然体積	包含物	炭化物・焼土		
平面プラン	不正円形	規模	3.2×(2.6)	主軸	不明		
床	検出 明確	状態 軟弱	掘方 なし	貼床 なし	貼替え		
床面焼土等	有無 なし	状況					
壁	検出 不明瞭			状態	やや緩やか		
柱 穴	有無 なし	内容	遺物	柱痕			
周 溝	状態 全周 幅約20cm		遺物 なし				
炉	不明						
備 考	埋土中遺物	縄文前期中葉土器細片ごく少量（図示せず）・黒曜石剥片					



挿図6 1号住居址



挿図7 2・5号住居址

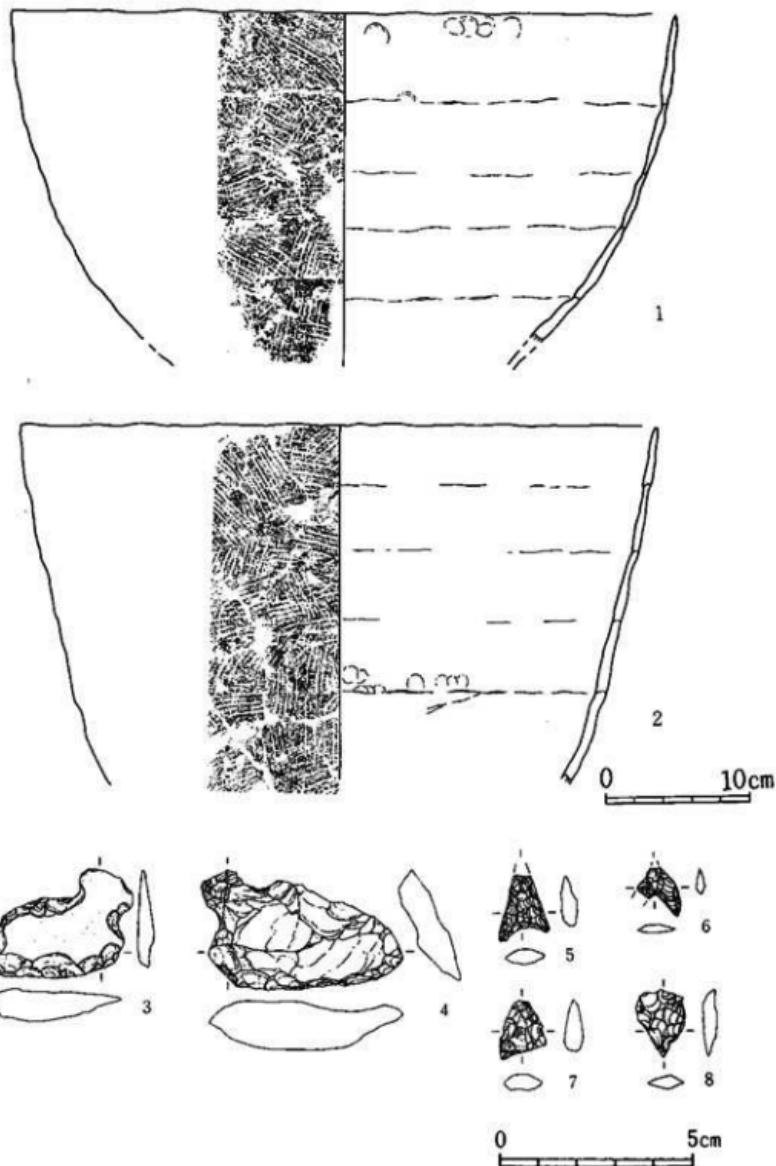
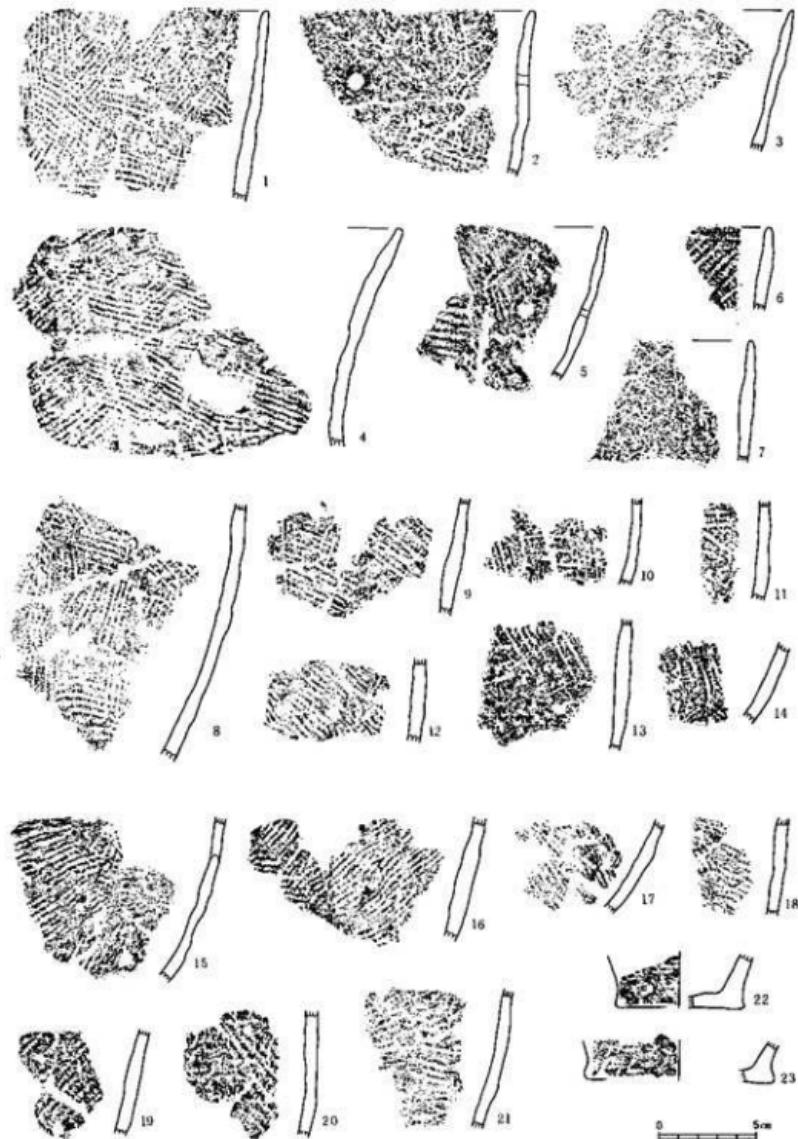


插圖 8 1號住居址出土遺物(1)



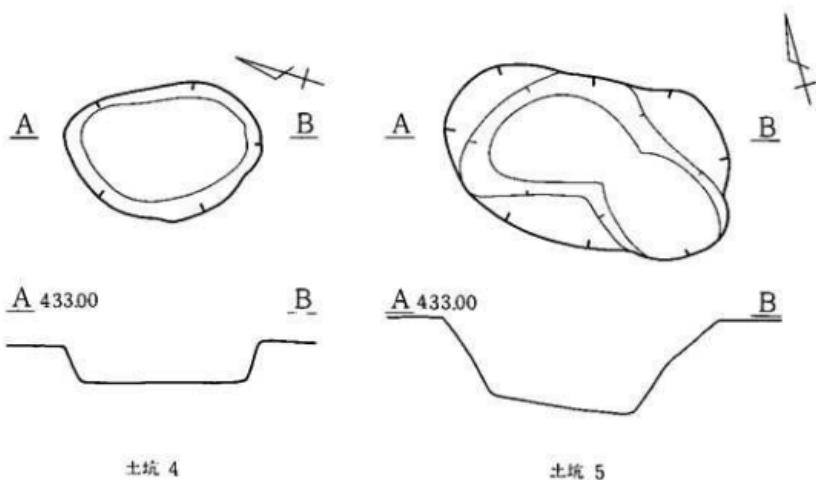
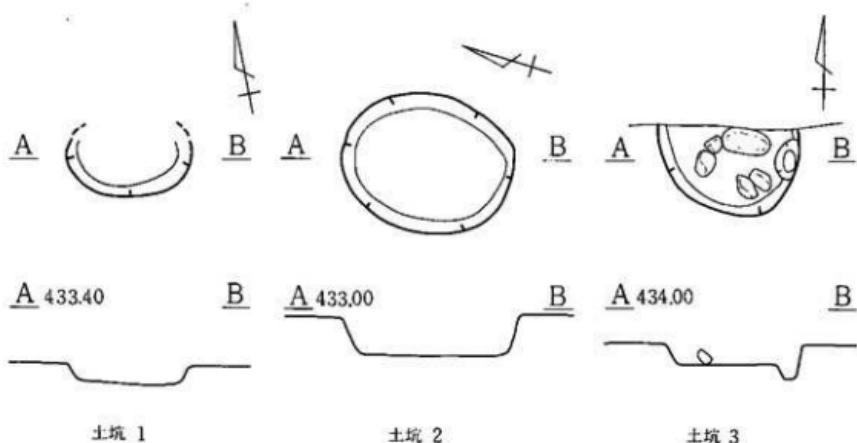
插図9 1号住居址出土遺物(2)

(3) 5号住居址(拵図7)

遺構番号	5号住居址	時期	不明	検出位置	A X-28	検出面	II層上面		
平面検出	結果	不明確	根拠	2号住居址調査中覆土の差から判明					
新旧関係	2号住居址に切られる			根拠	セクション				
埋土	分層	単層	埋没過程	自然堆積	包含物	炭化物ほか			
平面プラン	円形		規模	3.0×1.8m	主軸				
床	検出	不明確	状態	軟弱	掘方	なし	貼床	なし	貼替え
床面焼土等	有無	なし	状況						
壁	検出	II層を掘り込むが、不明確			状態	やや緩やか			
柱穴	有無	不明	内容	遺物	柱痕				
周溝	状態	なし		遺物					
炉	不明								
備考	埋土中遺物	なし							

2. 繩文時代の土坑(拵図10)

土坑NO	拵図NO	規模(長×短×深さ)cm	形態	埋土	時代・時期	備考
1	1	86×-×14	楕円	褐色土	繩文前期	北半分確認できず
2	2	120×94×31	楕円	褐色土	繩文前期	埋土に焼土混入
3	3	96×-×16	楕円	褐色土	不明	覆土中に礫
4	4	136×92×27	楕円	黒色土	繩文前期	
5	5	260×114×68	楕円	黒色土	繩文前期	



挿図10 縄文時代の土坑

3. 古墳時代の堅穴住居址

(1) 3号住居址（挿図11、14）

遺構番号	3号住居址	時期	古墳前～後期	検出位置	Ⅲ A T 49付近	検出面	II層上面
平面検出	結果 不明確	根拠 いわゆるレンズ状の堆積を示し、壁際に崩落土があり不明確					
新旧関係	なし				根拠		
埋土	分層 2層		埋没過程 自然埋没と考えられる		包含物 炭少量		
平面プラン	長方形		規模 5.4×6.2m		主軸 N51°W		
床	検出 明確	状態 上軟弱／下堅固	掘方 あり	貼床	明確で全体的	貼替え	1回
床面焼土等	有無 なし		状況				
壁	検出	Ⅲ層を掘り込み、明確			状態 やや緩やか		
柱穴	有無 あり	内容 主柱穴3本補助約10本		遺物 P 1瓶	柱底 不明		
周溝	状態 北東・南東壁直下、幅20~30cm			遺物 なし			
炉	炉 …中央や北西側の貼床下、地床炉						
カマド	カマド…北西壁中央、扁平な河原疊4~5個両袖に立て並べた石芯粘土カマド						
住居内施設	有無 あり	内容	入口施設、南東壁中央東寄り	遺物	あり		
埋甕・伏甕	有無	状態	蓋石		遺物		
増改築	有無	根拠					
床下遺構	有無 なし			遺物 なし			
埋土中遺物	土師器甕・坏・高坏						
床面遺物	土師器甕・小型甕(挿図14-1)・壇(2)・坏(3・4)・高坏(5~7)・鉢 土製纺錐車、土製玉(3.5×3.3cm、橢円形)						
各施設遺物	編物石…南隅の落ち込みに、20~30cmの棒状自然疊(硬砂岩)の集積、使用状態 を示すと考えられる。						
その他	入口施設…土師器甕・高坏						
その他	入口施設にわずかに土手状縁部あり						

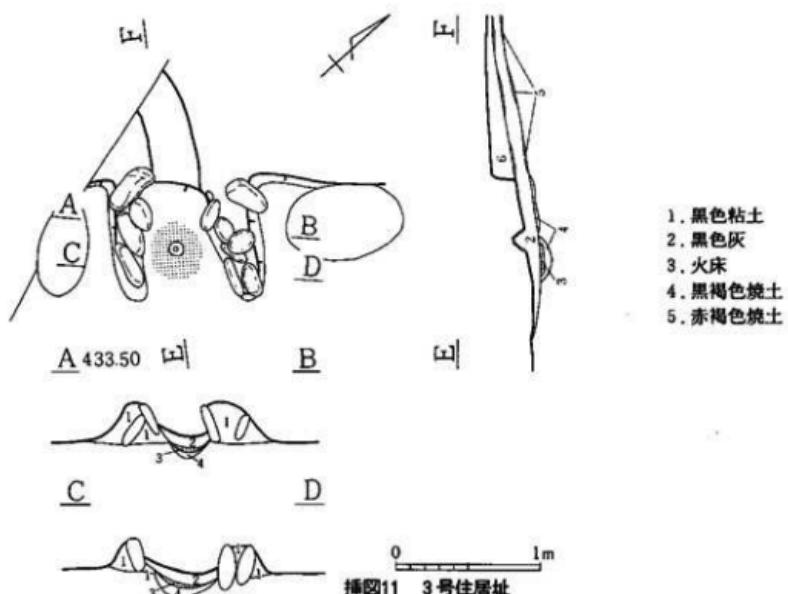
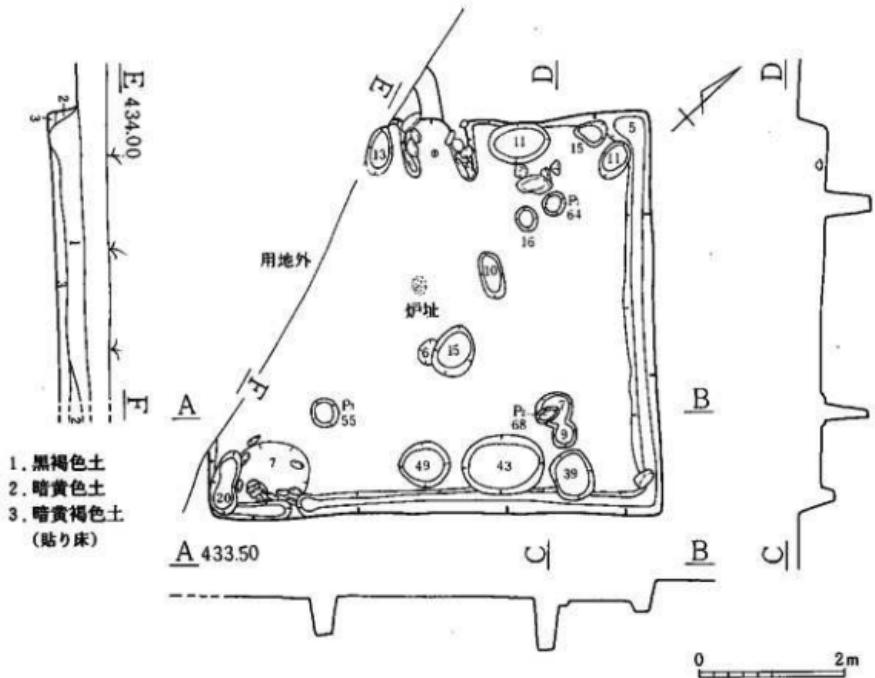


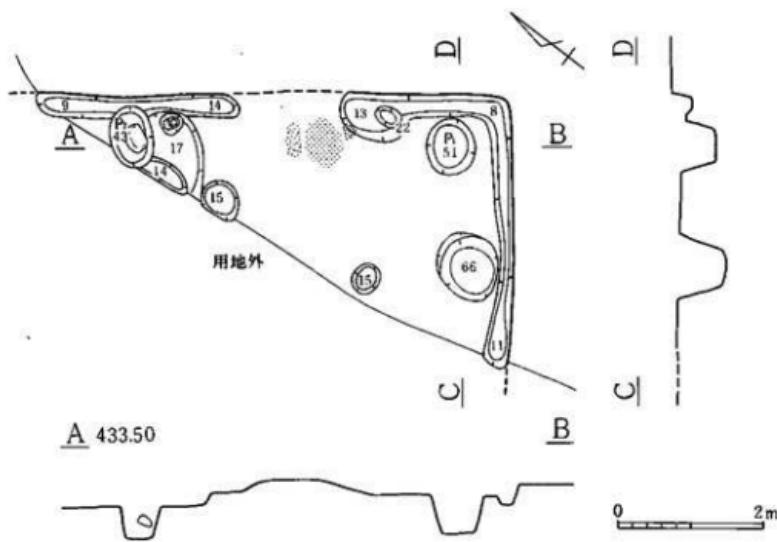
插图11 3号住居址

(2) 4号住居址(挿図12、14)

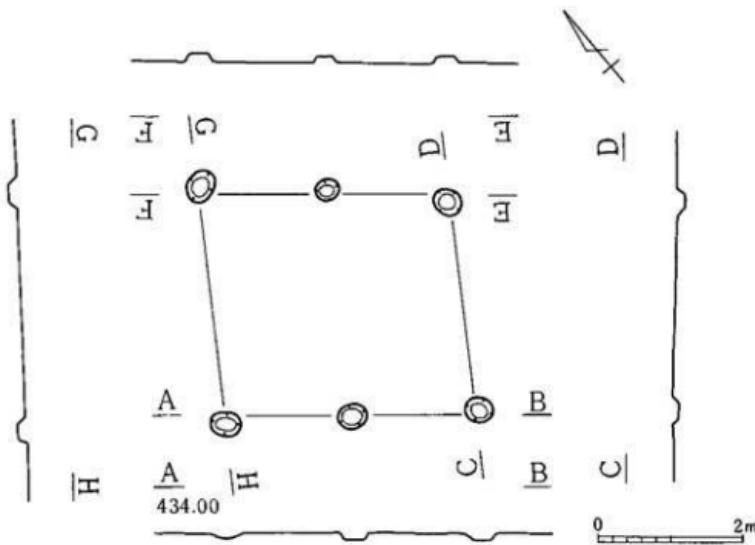
造構番号	4号住居址		時期	古墳後期	検出位置	I A A47付近	検出面	II層上面		
平面検出	結果	明確	根拠	上部がほとんど削平を受け、周溝検出						
新旧関係	なし		根拠							
埋土	分層	黒褐色土単層	埋没過程	削平を受け不明		包含物	なし			
平面プラン	方ないし長方形		規模	大半が調査区外にかかり不明		主軸	N52° E			
床	検出	不明確	状態	軟弱	掘方	あり	貼床	カマド前面		
床面焼土等	有無	なし	状況				貼替え	なし		
壁	検出	削平によりない				状態	不明			
柱穴	有無	あり	内容	主柱穴2本、補助4本	遺物	あり	柱痕	不明		
周溝	状態	カマド下を除き連続して検出			遺物	ほとんどなし				
カマド	カマド…北東壁中央付近に火床、その両側袖と考えられる位置に焼土を検出。左袖と考えられる焼土の中央寄りに粘土があり、石芯粘土カマドと考えられる									
住居内施設	有無	あり	内容	入口施設(南東壁中央寄り)		遺物	あり			
埋甕・伏甕	有無		状態	蓋石		遺物				
増改築	有無	なし	根拠							
床下造構	有無	なし		遺物	なし					
埋土中遺物	土師器壺・环等									
床面遺物	土師器壺・环・高环等									
各施設遺物	補助柱穴…須恵器長颈瓶他 入口施設…土師器壺・环等									

4. 古墳時代の掘立柱建物址

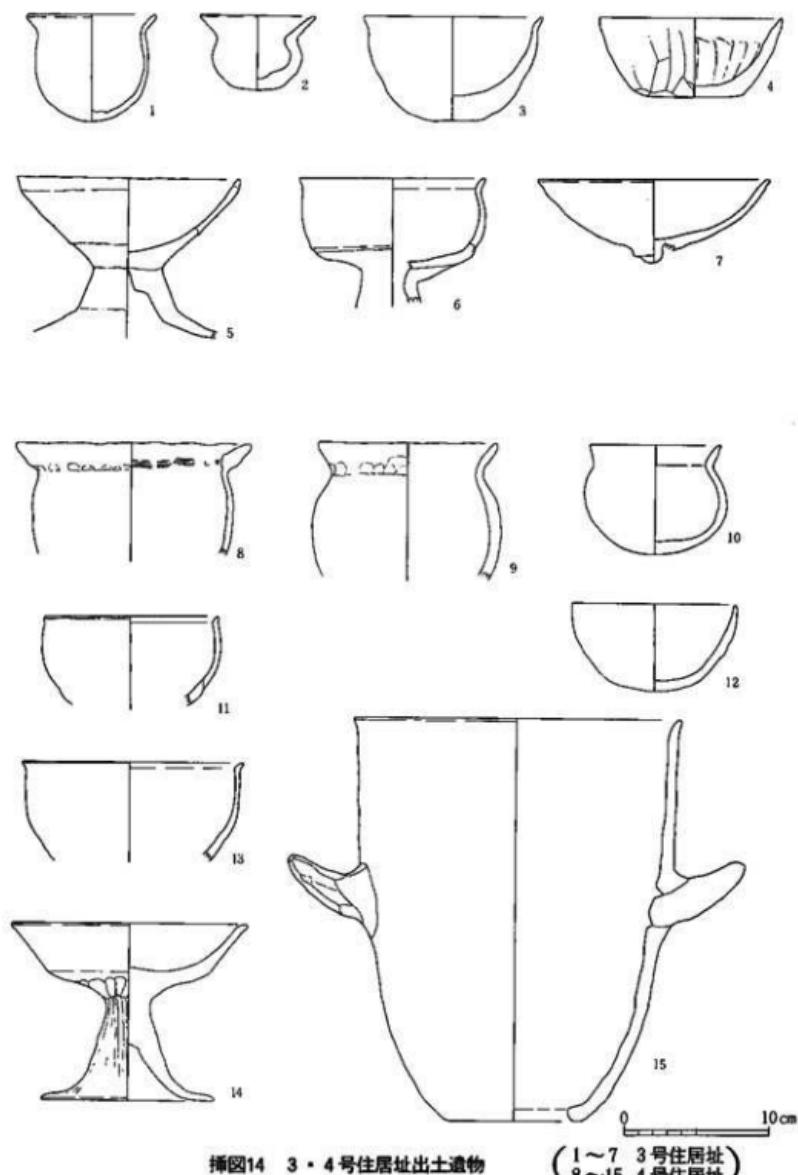
掘立NO	挿図NO	規模(梁行×桁行)cm	柱間	埋土	柱穴規模cm	備考
1	13	390×360	2×1	黒褐色	40×30×10	遺物なし、不整形



插図12 4号住居址



插図13 捩立柱建物址 1



插図14 3・4号住居址出土遺物

(1~7 3号住居址
8~15 4号住居址)

5. 中世の集石墓

墓NO	挿図NO	規模(長×短×深さ)cm	形態	埋土	時代・時期	備考
1	16	145×95×56	長方形	褐色	中世	銭貨、15~40cmの躰

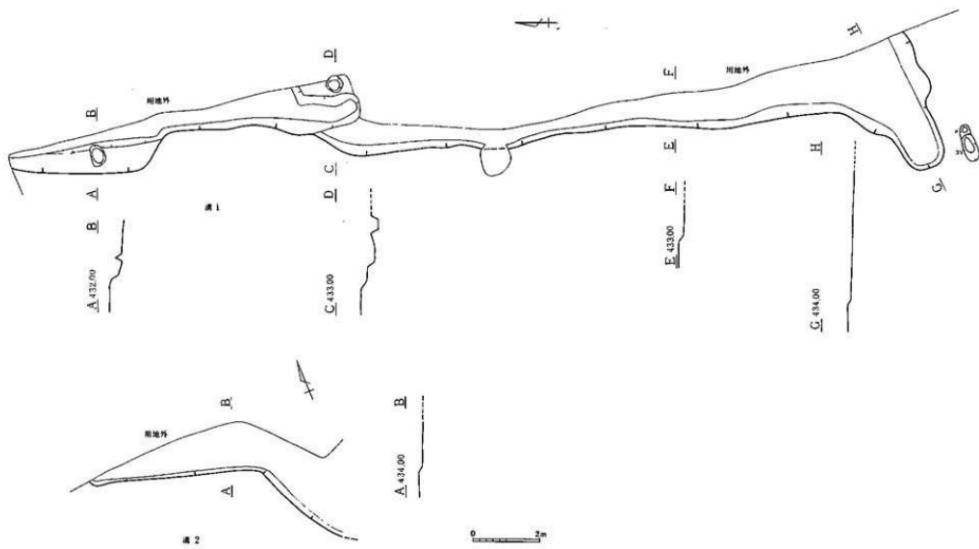
6. 時期不明の遺構

(1) 溝址

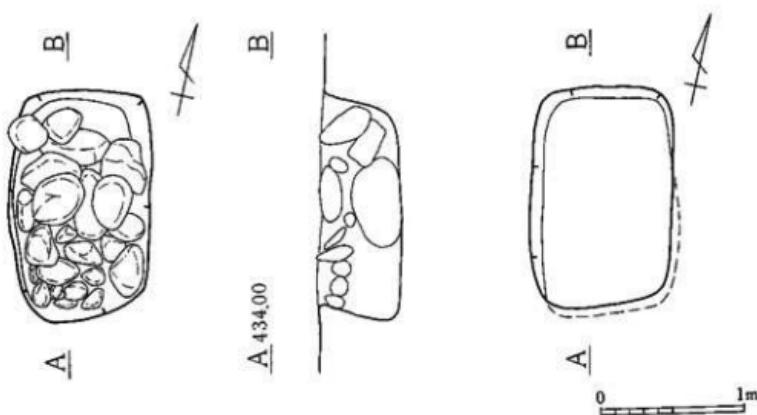
溝址NO	挿図NO	規模(長×短×深さ)cm	形態	埋土	時代・時期	備考
1	15	-×-×10~40	矩形	暗褐色	時期不明	調査区外にかかる
2	15	-×-×10	矩形	褐色	時期不明	調査区外にかかる

(2) ピット(挿図17、18、19、20)

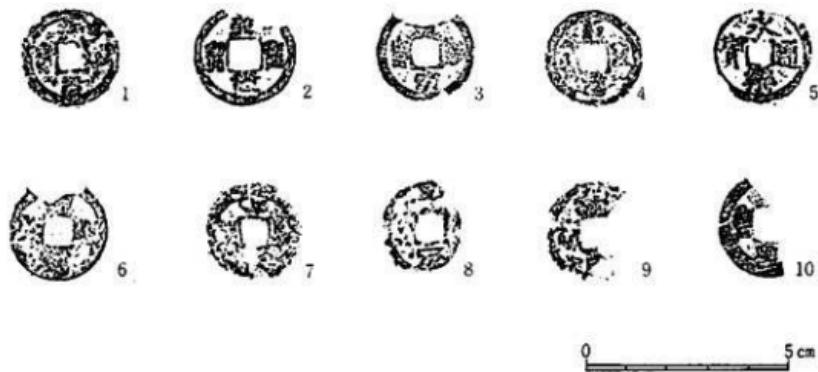
調査区のうちで、いくつかのピットが検出できた。その分布をみると、溝址1北西側の一群、集石墓1周辺の1群、1号住居址周辺の1群に分けられる。これらのうち、溝址1北西側及び集石墓1周辺の1群については、平面形・規模・埋土等に統一性がみられず、遺物も出土していない。一方、1号住居址周辺の一群は埋土も類似しており、少量であるが縄文前期の土器片が出土している。また、5号住居址北西には一列に並ぶものもみられ、建物址の可能性も捨て切れないが、確実に断定できるものはなかった。



博図15 溝1・2

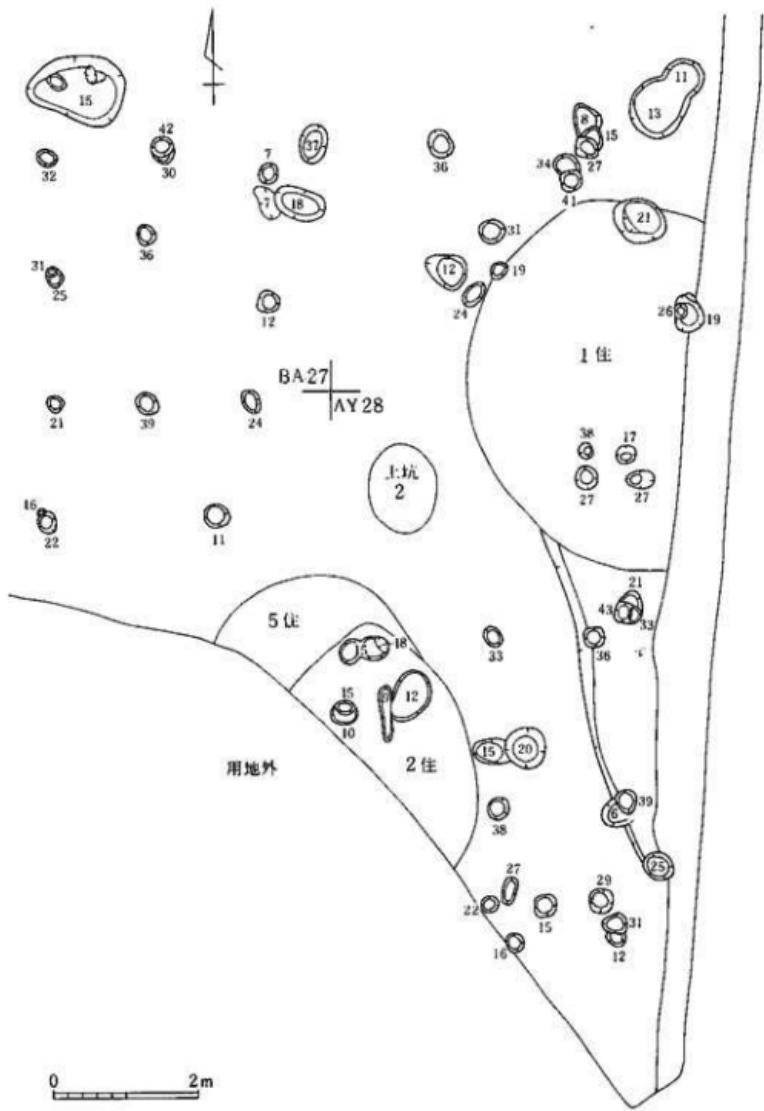


集石墓 1

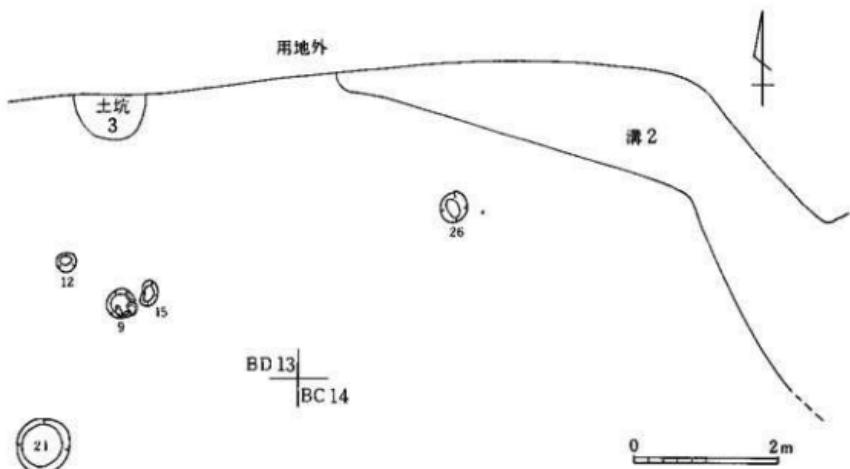
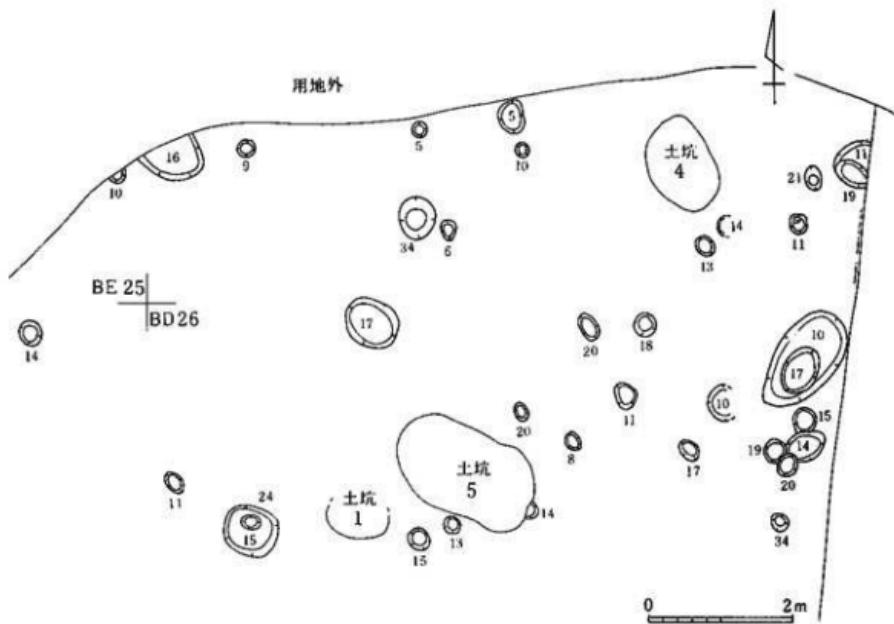


No.	掲図番号	錢名	年代	初鑄年(西暦)	備考
1	1	宋遼元寶	北宋	(968~975)	
2	2	天聖元宝	北宋:天聖元年	(1023)	私鋤銭の可能性あり
3	3	皇宋通宝	北宋:寶元2年	(1039)	
4	4	紹聖元宝	北宋:紹聖元年	(1094)	
5	5	永樂通寶	明:永樂6年	(1408)	
6	6~10	不明銭			

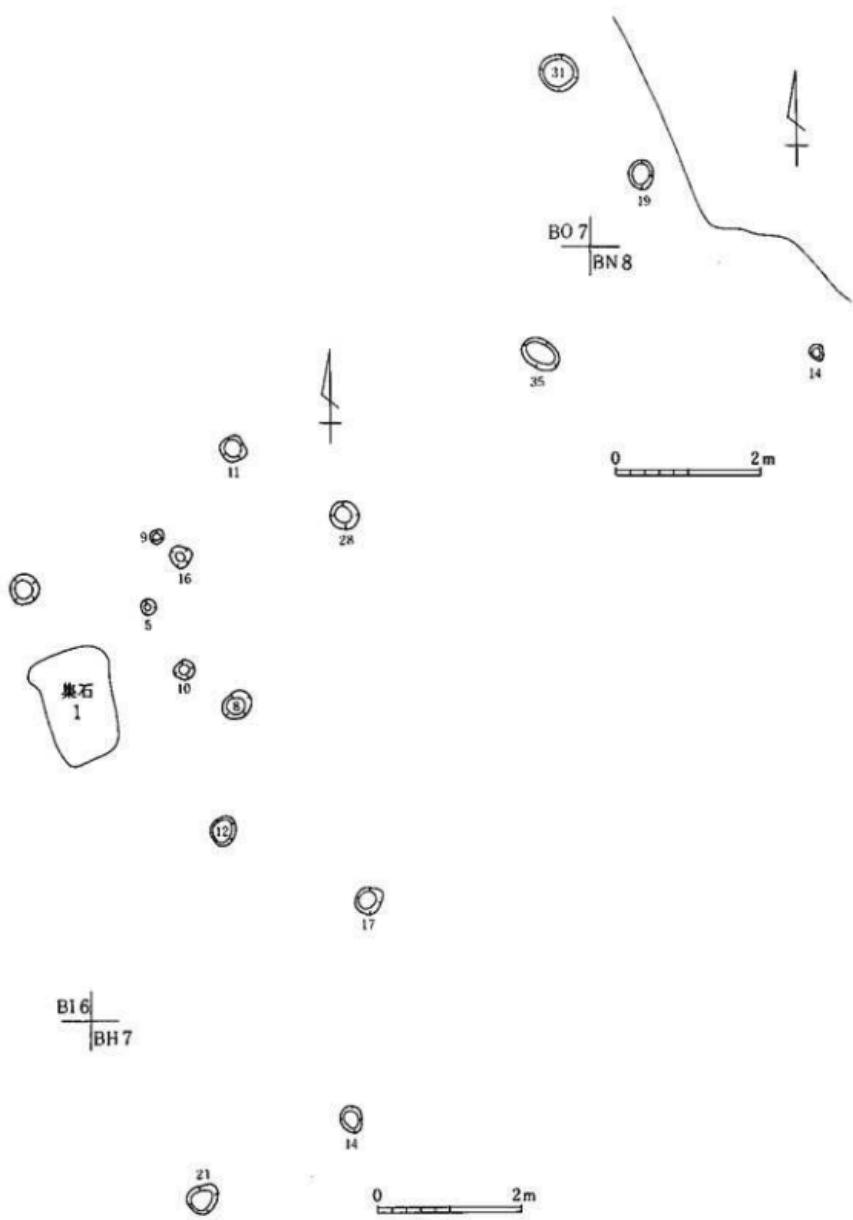
掲図16 集石墓1及び出土遺物



插図17 ピット(1)



擇図18 ピット(2)



挿図19 ビット(3)



插図20 ピット(4)

IV 総括

今回の調査は、県道整備事業予定地という狭い範囲に限られたもので、遺跡全体からみれば、そのごく一部に試掘坑をあけた程度のものといえる。その調査結果は、本文中に記したとおりであり、今まででは地表面において微量な遺物のみで推測されていた本遺跡の実態により深く触れることが出来る調査であった。特に縄文時代前期中葉の住居址およびカマドと地床炉の双方を持つ古墳時代の住居址などが確認されたのは龍東地区では初見であり注目すべき成果といえる。そこで、これらに関する調査成果の到達点と課題を中心に、時代毎の概要を記して今次調査の総括としたい。

1. 縄文時代

龍江大平遺跡からは縄文時代前期中葉の住居址が3軒確認されている。この結果、縄文時代の集落は天竜川に面する段丘崖縁ではなく、調査区外南側に広がることが予想された。また、3軒の住居址の中でも、1号住居址からは器面に縄文のみを施文する土器群が2個体以上出土し注目される。これらの土器の特徴を列記すると以下のとおりである。

- ① 口唇部が先細り気味に尖り、口縁部はやや内弯気味に直立する。(挿図8-1)
- ② 器形は、平縁で胴部から丸みを持ちながら立ち上がる深鉢形と、胴部から口縁部へ緩い角度で直線的に開く深鉢形の2種がある。(挿図8-1・2)
- ③ 太さの異なる1段・2本を擦りあわせた単節LRを用い、異方向に施文し、不規則な羽状構成をとるもの(挿図8-1・9-8)と、単節LRの方向差による継位の羽状構成をとるもの(挿図9-4)が見られる。
- ④ 内面は指頭痕・整形痕が顕著に見られ、繊維は混入されず、薄手である。
- ⑤ 底部はごく小さな平底を呈する。(挿図9-22・23)

以上のような特徴を持つ土器群は、長野県阿久遺跡(佐藤ほか 1982)・十二ノ后遺跡(樋口ほか 1976)・千鹿頭社遺跡(宮沢ほか 1975)・山梨県駿河堂遺跡(小野ほか 1986)・長野県殿村遺跡(氣賀沢 1990)等で数多く出土している。千鹿頭社遺跡では、3号住居址から良好な資料が出土しており、2号住居出土の関山式系の土器と組み合う可能性がつよく、神ノ木式の終末か直後に連続する時期と編年的位置付けを想定している。また、十二ノ后遺跡ではI群第4類G・I群第5類に分類されており、繊維を含まず、雲母を多く含み、裏面に指頭痕やそれに類似する凹凸が顕著に認められ、縄文は、斜縄文・羽状縄文・異条斜縄文などがあるとし、指頭痕の存在などから中越式・神ノ木式との関係を示唆しながらも、伴出關係から黒浜式との併行關係

を論じている。

一方、阿久遺跡では、阿久Ⅲ期Ⅰ群土器がこれに相当する。その特徴は千鹿頭社・十二ノ后遺跡と酷似しており、Ⅱ群土器（黒浜式に比定される織維土器）と明らかに共伴し、関東的織維土器の影響を受けながらも、中越式の系統をひく阿久Ⅱ期Ⅰ群D（神ノ木式に類似する一群）・E（織維を含まず、縄文施文の尖底土器）に祖源が求められるとしている。また、編年的位置については、有尾式より新しく、黒浜式の中葉以降に併行するとされている。

また、釈迦堂遺跡では、第2群土器第1類がこれに当たり、10軒の住居址から出土しており、そのほとんどから黒浜式が共伴し、特にSB06からは、北白川下層IIa式・木島系土器・黒浜式との共伴がみられる。この釈迦堂遺跡では上記の諸遺跡の成果をふまえ、第2群土器第1類を釈迦堂Z3式と型式設定している。

以上の点から、龍江大平遺跡1住の土器も同様な諸特徴を有しており、釈迦堂Z3式と考えられる。この釈迦堂Z3式は指頭痕・器壁の薄さ・無織維の諸特徴から東海地方の木島式をはじめとするいわゆるオセンベ土器との関係が濃厚であり、その中でより東海に近い伊那谷の様相は注目される。釈迦堂Z3式の伊那谷での様相は、遺跡数は少なく、駒ヶ根市殿村遺跡15住から清水ノ上II式・神ノ木式・有尾式・条痕調整のある北白川下層式と共伴事例のみである。しかし、同23住では清水ノ上II式・神ノ木式が出土しているものの、釈迦堂Z3式は出土していない。また、清水ノ上II式・神ノ木式が多量に出土した宮田村中越遺跡2住でも同様である。一方、本遺跡からは異系統土器の共伴は見られなかった。これから、その出現期は、阿久・釈迦堂などの成果が示す通り有尾式以降に求められよう。

また、縄文前期前葉木島・中越式期の伊那谷は宮田村中越遺跡・喬木村伊久間原遺跡が示すように在地の中越式が主体となる上伊那と、東海地方木島式そのものが主体となる下伊那に二分される。清水ノ上II式・神ノ木式の段階でもこの様相は同様である。神ノ木式以降の様相は上・下伊那ともに不明瞭となり、駒ヶ根市殿村遺跡例のみである。一方、東海地方でも上ノ坊式以降、黒浜式併行期において、オセンベ土器の系譜を引く薄手で指頭痕をもつ土器群の様相は不明瞭となる。或いは、大平遺跡における釈迦堂Z3式の様相が、東海地方の当該期の在り方を示している可能性がある。しかし、縄文・器形の系譜等多くの問題点があげられ、飯田・下伊那の類例の増加を待って改めて論じられる必要がある。

2. 古墳時代

今次調査では、調査区北西側端に古墳時代の住居址2軒が確認された。いずれの住居址も調査区の都合上全体の1/3~2/3程度の調査に止まった。このうち、3号住居址では、2面の貼床があり、上部の床面を剥したところ、住居址中央やや北寄りに20×30cmの地床炉が確認された。住居址北西側に確認されたカマドは、袖に20cm~40cmの偏平な礫を4~5個一列に並べ芯とし（一部2列の部分もある）粘土を貼り付けた石芯粘土カマドである。飯田市における他時期のカ

マドと比較すると、芯となる礫の規模は小さく、構成礫数が多いのが特徴的である。こうした点から3号住は地床炉からカマドへの過渡期的な住居と考えられる。同様な例は、北佐久郡御代田町前田遺跡（御代田町教委 1987）H-63号住などにみられる。同報告書では、H-63号住を6世紀初頭に位置付けている。また1993年に行われた埋蔵文化財研究会によるシンポジウム「古墳時代の窓を考える」（和歌山県文化財センター 1992）では、5世紀後半をカマドの出現期においており、飯田・下伊那では、飯田市山岸遺跡16・21・45住（長野県教委 1971）、天伯B遺跡2・34住（長野県教委 1971）などが挙げられている。本遺跡3号住の遺物のすべては、上面（カマドをもつ床面）から出土しており、山岸遺跡21住とその様相は類似しており、同様な編年的位置におかれよう。

以上、ごく限られた区域での調査であったが、古墳時代の集落は、縄文時代と異なり、調査区北西の天竜川に面する段丘崖線辺に広がることが予想される。また、出現期のカマドを有する住居址の発見は、地床炉からカマドへの変化を考察する上で良好な資料となった。

3. 中世以降

古墳時代以降、本遺跡では中世まで人々の生活した痕跡は認められない。この間の土地利用状況は不明であるが、中世以降の本遺跡は、溝址・集石墓などが確認されており、また調査区周辺には、五輪塔・近世の石塔があることから、畠地・墓地などの土地利用が行われていたと考えられる。

今次調査の結果、縄文時代前期・古墳時代についていくつかの新知見を加えることができた。特に、縄文前期中葉の住居址は飯田市では初見であり、また、地床炉とカマド双方を有する古墳時代の住居址が確認されたことは大きな成果であった。今後周辺地域の調査が進展するに伴い、本遺跡の位置付けが明確になると思われる。

最後に、今福利恵・小山岳夫・堤 隆・中沢道彦・廣田和穂・綿田弘実・賛田明の各氏に、資料の実見・指導・参考文献の収集に便宜を図っていただいた。記して謝意を表する次第である。
(下平博行)

参考文献

- 飯田市教育委員会 1994 『中村中平遺跡』
- 市村咸人 1955 「下伊那史」第2巻 下伊那史編纂会
- 市村咸人 1955 「下伊那史」第3巻 下伊那史編纂会
- 長野県教育委員会 1975 「山岸遺跡」 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書
－下伊那郡昭和町その2－
- 長野県教育委員会 1975 「千鹿頭社遺跡」 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書
－諏訪市その3－
- 長野県教育委員会 1976 「十二ノ后遺跡」 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書
－諏訪市その4－
- 下伊那史編纂会 1991 「下伊那史」第1巻
- 下伊那歴史考古学
研究所 1981 『信濃 御殿田』
- 長野県教育委員会 1982 「阿久遺跡」 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書
－原村その5－
- 平凡社 1982 『日本やきもの集成』2 東海甲信越
- 平凡社 1984 『やきもの事典』
- 宮田村教育委員会 1990 『中越遺跡』
- 山梨県教育委員会 1986 『釈迦堂I』
- 埋蔵文化財研究会 1992 『古墳時代の竪を考える』第2分冊 －東海・中部・北陸・関
東・東北・北海道編

報告書抄録

ふりがな	たつえおおだいらいせき						
書名	龍江大平遺跡						
副書名	主要地方道飯田・富山・佐久間線道路整備事業に先立つ 埋蔵文化財包蔵地龍江大平遺跡発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	馬場保之・下平博行						
編集機関	長野県飯田市教育委員会						
所在地	〒395長野県飯田市上郷飯沼3145番地 ☎0265-53-4545						
発行年月日	西暦1995年3月20日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号			㎡	
たつえおおだいら 龍江大平	いいだしたつえ 飯田市龍江 7560-1他	2053		32° 26' 10"	137° 49' 30"	平成5年 12月16日 平成6年 2月8日	1,100㎡ 道路整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
龍江大平	集落址	縄文前期 古墳前～後期	竪穴住居址 3軒 竪穴住居址 2軒	縄文前期土器 須恵器 土師器	4個体 1点 多数		

写 真 図 版

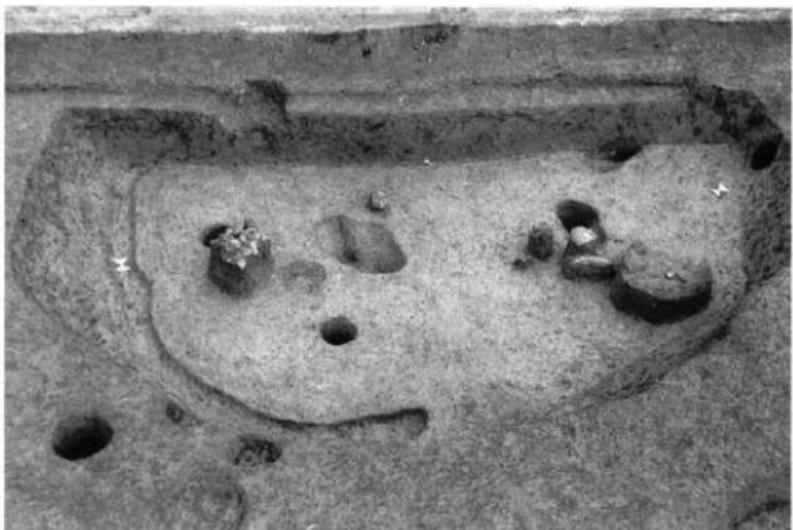
図版 1



調査区全景

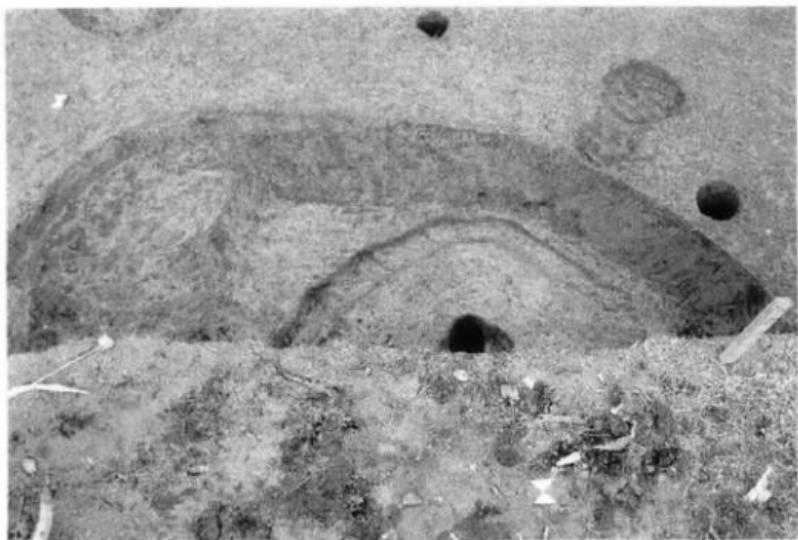


1号住居址

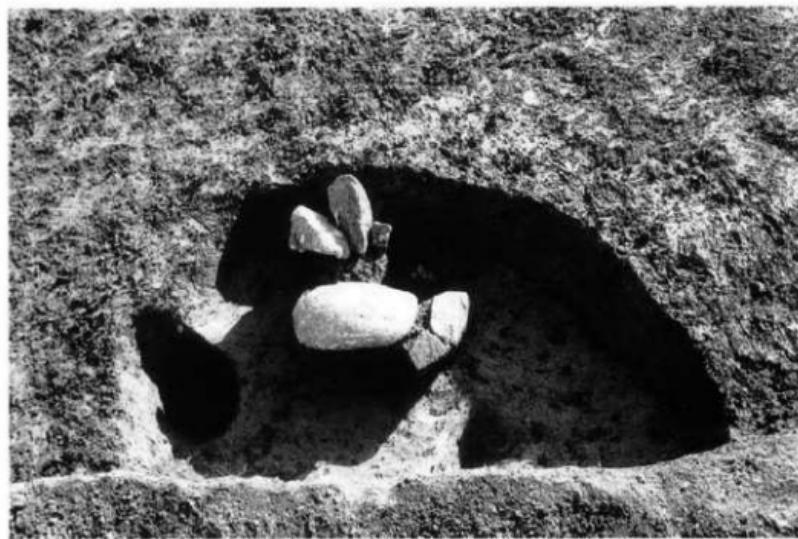


1号住居址遺物出土状況

图 版 3



2·5号住居址



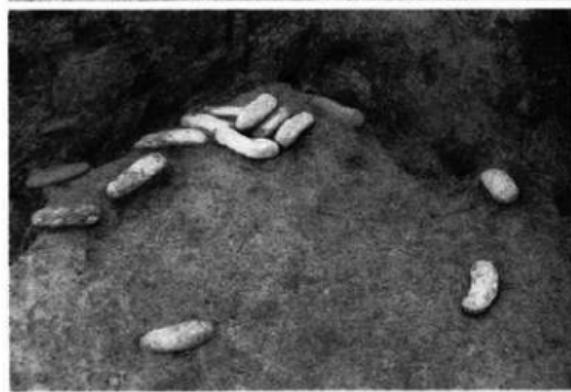
土 塘 3



3号住居址



3号住居址遺物
出土状態



同 上

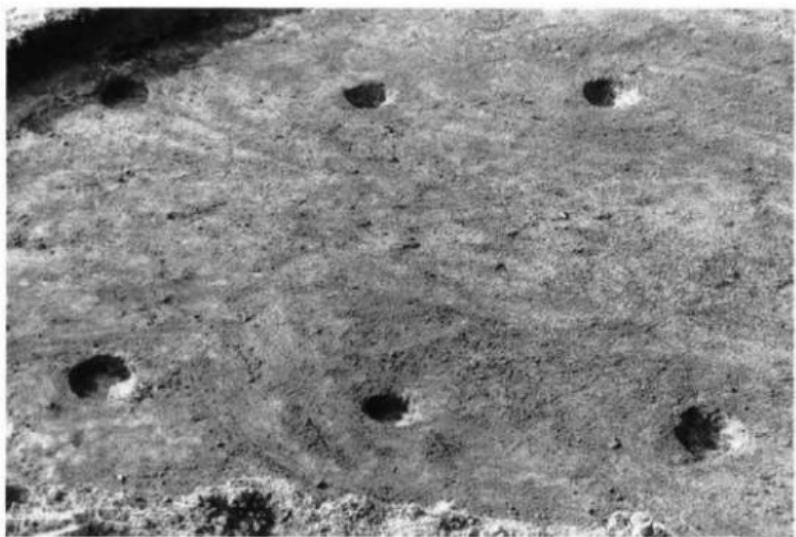
図 版 5



3号住居址カマド



4号住居址

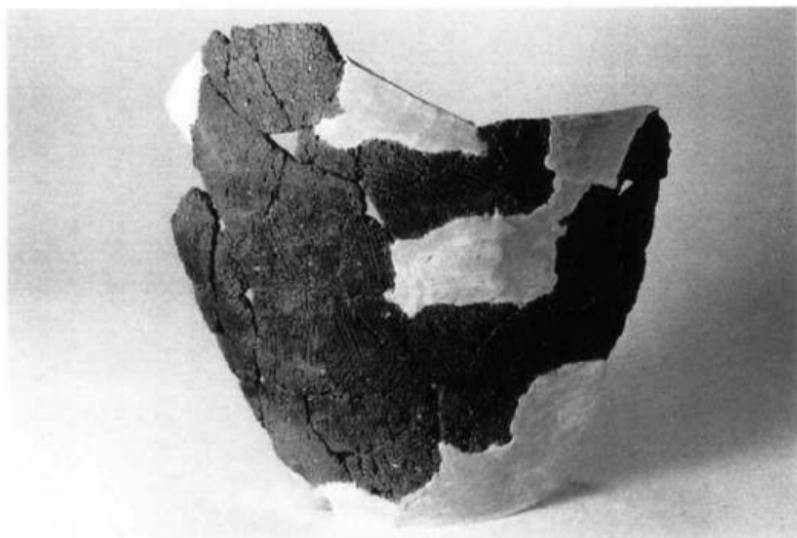


据立柱建物址 1

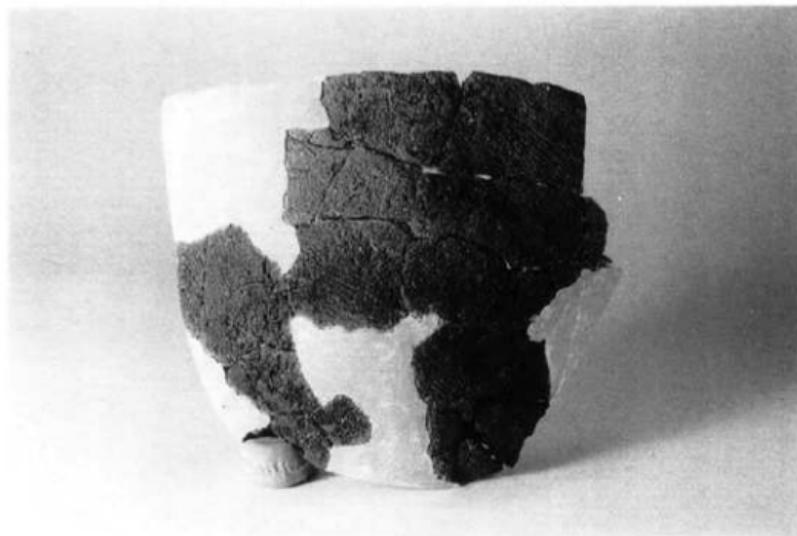


集石墓 1

图 版 7

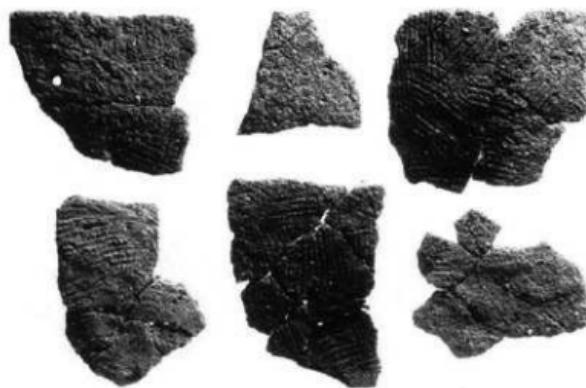


1号住居址出土土器



1号住居址出土土器

図版 8



1号住居址出土土器



同 上



同 上

図版 9



3号住居址出土遺物



4号住居址出土遺物



調査風景



委託測量風景

図版 11



重機作業風景



現地見学会風景

龍江大平遺跡

主要地方道飯田・富山・佐久間線道路整備事業に先立つ
埋蔵文化財包蔵地龍江大平遺跡発掘調査報告書

1995年3月 発行

編集・発行 長野県飯田市上郷飯沼3145

長野県飯田市教育委員会

印 刷 龍共印刷株式会社
